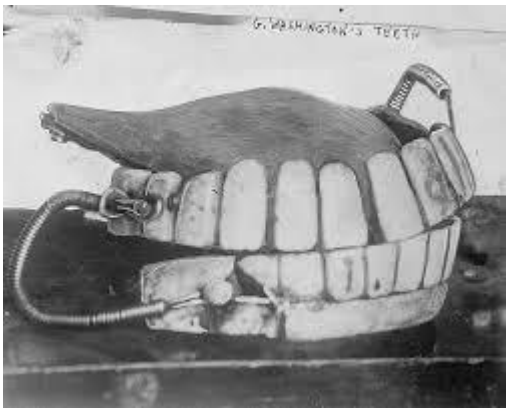
＜口腔の役割＞　82

1 ドル札のワシントン

アメリカ合衆国の初代大統領のジョージ・ワシントン（1732～1799 年）はその人生を通して歯の問題に悩まされ続けていました。ワシントンはむし歯の進行が早く、1 ダース単位で歯ブラシを購入し、日々歯磨きに勤しんでいましたが、努力のかいなく 22 歳から次々に歯を失いました。28 歳から自称歯科医という人たちから始まり、有名な歯科医の手によりさまざまな義歯（入れ歯）を試すはめになりましたが、どれも使い物にならず、生涯使用した義歯の数は 6～7 個あると言われます。

合衆国初代大統領に就任した 57 歳当時（1789 年）、下の歯 1 本を残してすべての歯を失っていたワシントンが使用した義歯はロウを塗った鉛の合金の土台に上の義歯は大鹿やカバの牙を彫刻したもの、下の義歯は人間の歯を埋め込み、義歯の総重量はおよそ 1.3 キログラムもあり、上の義歯を支えるには非常に強力なスプリングが必要でした。



ジョージ・ワシントンの義歯

＜上下の義歯は強力なスプリングにより固定されています＞

残った１本の歯は常に痛みがあり麻薬のアヘンチンキを使用していたとも言われます。64 歳時、残りの１本を抜歯したワシントンは歯の痛みと歯肉の腫れから開放されましたが、歯茎が平らになったため、義歯が口から飛び出さぬように押さえるものは、もはや顔の筋肉だけになりました。ワシントンの周辺にいた人たちは義歯による食事の際の不満や痛み、容貌の変化や発音の不明瞭さが、短気な性格にも影響し、笑顔もなく、極度に神経過敏なワシントンに対し非常に気を使ったようです。

当時の義歯を口いっぱいに含んだワシントンの容貌はのちにアメリカ１ドル札に描かれましたが、心ある人々は、なぜ歯が抜け落ちる前のワシントンの肖像画を使用しなかったのかと不憫に思ったそうです。



１ドル札に描かれたジョージ・ワシントンの肖像
＜口から義歯が飛び出さぬよう顔を緊張させています＞

さてそんなワシントンですが、大統領３選が確実だったにも関わらず、２期８年の任期を終えると、周囲からの３期目の期待を退け自ら大統領の座を引退します。この決断は権力に固執しない、平和的な権力移譲という前例を作るためだったとされ、この慣習は後にアメリカ合衆国大統領職の重要な伝統となりました。その一方で心無い人々からは３選目を辞退した理由について、ワシントンは義歯のため、クリアな発音ができず、大勢の聴衆の前での演説ができなくなったからだと囁かれました。

ワシントンは生涯、義歯の悩みに格闘しながらも、自身が確立した大統領としての振る舞いの規範は、その後のアメリカ大統領たちに長く受け継がれることになります。

（参考）エピソードでつづる「義歯の歴史」J.Woodforde 著　森　隆訳
財団法人　口腔保健協会（1990 年）

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】